

4. 城郭石垣における石丁場調査の位置づけ

大 嶋 和 則

織豊系や近世城郭は、現在の都市の発展の礎であり、シンボリックな存在として認識されており、国史跡や地方自治体の史跡指定を受けているものが多い。その史跡の構成要素として最たるものが石垣である。その本質的価値は、近世以来遺構として存在する「歴史の証拠」と、曲輪や櫓台などの地盤や櫓や門などの建築物を支える「安定した構造体」からなる。

しかし、日本で初めて石垣解体修理に伴い発掘調査行われたのは、昭和 33 年の姫路城天守台である。調査範囲は限定的ではあるものの、石垣内部に羽柴秀吉時代の石垣が発見されたことは、考古学的な調査。一方で、全国の城郭の石垣解体修理では、「安定した構造体」としての修理が先行し、文化財的な調査の進展は低調なままであった。

平成元年頃からは文化庁の指導・助言等もあり、石垣も「歴史の証拠」としてとらえられるようになり、解体修理の事前に石垣天端の発掘調査や解体と並行しての調査が行われるようになってきた。しかし、石垣という特殊な遺構の調査で、かつ解体修理工事と並行するためその調整等について各地方自治体の文化財担当者は試行錯誤の上、調査方法を検討しながら調査を進めていた。このころから、石垣の石材カルテを作ることなども行われるようになった。しかし全国的には依然、「安定した構造体」が重視される傾向があった。

画期となったのは平成 16 年に文化庁等が主催となり第 1 回目が開催された全国城跡等石垣整備調査研究会であろう。全国の石垣解体修理担当者が一堂に会し、議論することで、石垣解体修理における調査方法の情報交換や共通認識が共有されたことによる。また、同研究会には設計業者、施工業者、石工なども集い、相互に情報交換がなされたことも大きい。これ以後、「歴史の証拠」として調査を行うことが通例化され、同研究会の議論をもとに、平成 27 年には文化庁監修の『石垣整備のてびき』が刊行されるに至った。なお、同研究会では石垣解体修理だけではなく、石垣そのものの研究や石丁場などについても議論の対象となっており、飛躍的に研究が進んでいる。

石丁場の調査は、古くは『香川県史蹟名勝天然記念物調査』などに小豆島の石丁場についての記述が見られるが、本格的には昭和 40 年代に入ってからで、小豆島の大坂城石垣石丁場跡や東六甲山系、伊豆半島において調査が行われたが、その多くは刻印や矢穴のある残石の分布調査が主眼であった。昭和 50 年代以降は考古学の分野で、石引道、作業平坦面、母岩掘削遺構などの遺構の存在が示され、採石方法の復元なども行われている。現在も、各地で精力的な調査が行われており、全国の石丁場の集成も行われ、各地の石丁場の情報が共有されつつある。

一方で、石丁場の取扱いは地方自治体によって大きく異なる。そもそも、埋蔵文化財の調査では中世までが主な対象として認識されてきた傾向があり、近世の遺跡については調査されることも少なかったが、平成 10 年 9 月 29 日付け文化庁次長次長による「埋蔵文化財の保護と発掘調査の円滑化等について（通知）」によって、埋蔵文化財として取り扱う範囲を概ね中世までの遺跡を対象とし、近世のものは地域で必要なものが対象とされた。このため、近世の遺跡の多くは、埋蔵文化財包蔵地としてすら周知されていない。城郭ですら史跡指定地より外側の城跡全域から城下町までを埋蔵文化財包蔵地として周知している自治体もあれば、史跡指定地のみを保護の対象としている自治体さえある。小豆島では多くの石丁場が国・県・町指定の史跡として認識される一方、全国的に見れば埋蔵文化財包蔵地として認知されていないケースも多い。埋蔵文化財包蔵地として認知されないがゆえに、石丁場の

調査は行われず、石丁場の文化財的価値が明確にならない。

石丁場は城郭石垣にとって石材の生産地であり、城郭石垣を構築する上では、その石材という部品を生産する部品工場とも言える。しかし、一般的な石材加工品の生産地と消費地という関係性ではなく、石丁場での採石、石丁場から対象となる城郭への運搬、城郭での石積み等の一連の工程が密接に関係をもってできるものであり、全体の工程が石垣普請と言えるものである。単に城郭石垣という遺構の調査を行い、「歴史の証拠」としての価値を明らかにするのではなく、その背後にある一連の石丁場や石引道や水運といった運搬経路の調査を行い、全体としての石垣普請過程を解明することこそが、城郭石垣の本質的価値を明らかにすることと言える。また、各工程の技術や工法を明らかにすることは、当時の土木技術の水準を考える上で極めて重要で、石垣のもう一つの価値である「安定した構造体」の解明にもつながるものと考えられる。

また、城郭石垣用に採石された石丁場は、当該城郭の普請が完了すれば、その目的を失う。大坂城築城に伴い採石された岩谷丁場のように、採石後も藩の管理下に置かれ、概ね大坂城築城当時の姿を保ってきたものがある。一方で、城郭石垣の修理等のため数時期にわたって用いられた石丁場や、城郭以外にも石材を搬出した石丁場も想定できる。多くの石丁場で時期差があると考えられる複数型式の矢穴が確認されることは、これを示唆するものであろう。中には、採石が行われ続け、地域の産業として根付いているところもあり、それは文化的景観とも言える。さらには、そもそも城郭石垣以外の目的で採石された石丁場もある。文献史料の分析により、大名が直接採石を行っていたが、寛永末期に採石の町人請負が城普請以外で行われるようになり、その後、城普請でも町人請負が行われたことが判明している（白峰 2010）が、石丁場の在り方は多様であり、その実態が解明されている石丁場は少ないと言わざるを得ない。

今後、歴史学による史料調査の蓄積に加え、考古学的な調査により石丁場の遺構の変遷や、採石者、採石目的等、石丁場の実態を明らかにする必要がある。さらには、自然科学や工学的な調査など、地盤や石材の特性も視野に入れた総合的な調査が必要である。

【参考文献】

- 香川県史蹟名勝天然記念物調査会 1928『史蹟名勝天然記念物調査報告』第三
東北芸術工科大学 2003『石垣普請の風景を読む―城の石垣はいかにして築かれたか―』
白峰旬 2010「近世初期の小豆島・豊島（手島）における石場に関する史料について」『別府大学大学院紀要』12
織豊期城郭研究会 2014『織豊期城郭研究会 2014 年度金沢研究集会資料 付織豊期城郭資料集成Ⅲ 織豊期城郭の石切場』
文化庁文化財部記念物課 2015『石垣整備のてびき』